

青年後期と成人前期における
デート DV 被害
—恋人による被支配感に与える影響—

Dating Violence Victimization in Late Adolescence
and Early Adulthood:
Influences on the Sense of Being Controlled
by Dating Partners.

上野 淳子・松 並 知子・赤 澤 淳子
井ノ崎 敦子・青 野 篤子

Junko UENO, Tomoko MATSUNAMI, Junko AKAZAWA,
Atsuko INOSAKI, and Atsuko AONO

青年後期と成人前期におけるデートDV被害

—恋人による被支配感に与える影響—

Dating Violence Victimization in Late Adolescence and Early Adulthood:
Influences on the Sense of Being Controlled by Dating Partners.

上野 淳子・松並 知子・赤澤 淳子・

井ノ崎 敦子・青野 篤子

Junko UENO, Tomoko MATSUNAMI, Junko AKAZAWA,

Atsuko INOSAKI, and Atsuko AONO

要約

20歳から35歳までの未婚者を対象としてインターネット調査を行い、恋人から暴力行為を受けた経験と交際期間の長さが恋人によって支配されているという感覚に与える影響を検討した。暴力行為は精神的暴力、身体的暴力および脅迫、性的暴力を取り上げた。いずれの暴力行為も恋人から受けた経験は男女で差がなかったが、恋人による被支配感は男性が女性より高かった。男女とも、どの種類の暴力行為であってもそれを受けた経験がある者の被支配感が高かったが、女性では身体的暴力と脅迫、性的暴力が特に被支配感を高めており、これらの暴力行為が女性に重大なダメージを与えることが示された。男女いずれにおいても性的暴力を受けた群の交際期間が長く、女性においてのみ身体的暴力および脅迫を受けることと交際期間の長さが関連していた。交際期間が長くなるほどこれらの暴力行為が起きやすい可能性、あるいはこれらの暴力行為があると関係を絶ちにくい可能性が示された。交際期間と恋人による被支配感の関連は男性では見られず、女性では交際期間が短いほど恋人による被支配感が高くなることが明らかとなった。

キーワード：ジェンダー、支配－被支配関係、交際期間、恋愛、IPV

Key Words: gender, dominant relationship, relationship length, romantic relationship, intimate partner violence

1. 問題と目的

親密なパートナー間における暴力 (intimate partner violence; IPV) のうち、交際中の恋人による暴力である dating violence は日本では一般にデートDVと呼ばれ、近年その実態および生起メカニズムに関する様々な心理学的研究が行われつつある。しかし、それらの多くが大学生、あるいは大学生に加えて短大生、専門学校生を対象としたものであり (例えば赤澤・竹内, 2015; 井ノ崎・野坂, 2009; 松野・秋山, 2009; 松野・新井, 2015; 森永・Frieze・青野・葛西・Li, 2011; 笹竹, 2014; 寺島・宇井・宮前・竹澤・松井, 2013; 上野・松並・青野, 2018; 上野・松並・

青野・赤澤・井ノ崎, 2011)、赤澤 (2016) によるとそれに次ぐのが中学生、高校生を対象としたものである。若者の恋愛離れが進んでおり (片瀬, 2013; 国立社会保障・人口問題研究所, 2017)、大学生でさえ未だ恋人がいた経験がない者もかなりの割合に上ることを考慮すると、恋愛が最も盛んに行われ、ゆえにデートDVが生起するリスクが最も高い青年後期から成人前期を対象とした調査を行う必要がある。成人を含めた調査には、既婚者も対象としてデートDVの経験を問うものもあるが (内閣府男女共同参画局, 2018)、単なる交際相手と結婚に至った現配偶者もしくは元配偶者との関係性を弁別することができない、すなわちその後配偶者間のDVに発展したものが含まれ、それがデートDVの回答に遡及的に影響を与えている可能性を否定できないという問題があるため、本研究では、20歳から35歳までの未婚者を対象とし、デートDV被害に関する調査を行うこととした。

なお、本研究ではデートDV被害を、上野・松並・青野 (2018) と同様に、暴力行為とそれによって恋人から支配される程度 (恋人による被支配感) から成るものとして捉える。デートDV被害を単なる暴力行為を受けた程度によって捉える従来の方法ではなく、このような方法を用いるのは、暴力の本質は暴力行為そのものよりむしろ暴力行為によって形成、維持される支配-被支配関係であり (伊田, 2010)、相手への恐怖心から主体性を失い、その関係から逃げ出すこともできないという支配-被支配関係の強固さが暴力被害の大きさを判断する指標となるためである (上野, 2014)。

また、本研究では恋人との交際期間が被支配感に与える影響を検討する。交際期間の長さがデートDV被害とどう結びつくかについては一貫した結果が得られていない。まず、暴力行為との関係であるが、あらゆる暴力行為は恋人との関係性を深いと感じるカップルほど起きやすく (上野他, 2011)、関係の深さは交際期間の長さに伴うため、交際期間が長いほど暴力行為のリスクは高くなると考えられる。しかし、暴力行為のない関係は満足度が高いため持続しやすく (Kaura & Lohman, 2007)、暴力行為がないからこそ交際期間が長くなるとも考えられる。暴力行為の種類も交際期間と関連していると考えられ、身体的暴力や見下しといった精神的暴力がある者の交際期間は比較的長いことが示されている (松井・宮前・寺島・宇井・竹澤, 2012)。松井他 (2012) が指摘するように、そのような暴力行為を行う相手への恐怖心から別れられずに交際を続けてしまう可能性があり、ここでも暴力行為だけではなく恋人による被支配感に注目する必要があることが分かる。今野・泊 (2001) は恋人による被支配感と類似した概念である恋愛関係における被統制感という概念を用い、交際期間との関連を検討した。ただし、被統制感は相互依存的恋愛を念頭においたものでデートDVを想定していないため、相手を気にせずのびのびできるかといった内容のみで、恋人による被支配感の中核となる、交際相手に対する恐怖や不安といったネガティブな心理状態を直接尋ねる項目は含まれない点に注意が必要である。今野・泊 (2001) では交際期間が長くなるほど相手にコントロールされないという結果が得られたが、同じ項目を用いた今野 (1999) では交際期間が長くなるほどコントロールされるという逆の結果が得られている。したがって、暴力行為の種類と恋人による被支配感が交際期間とどう関係するかについては改めて検討する必要がある。

本研究で検討するモデルを示したのがFigure 1である。恋人から受ける暴力行為と交際期間

は相互に関連し、またそれぞれが恋人による被支配感へと影響するだろう。上述のように交際期間が暴力行為および被支配感に正負いずれの関連を示すかについては不明であるが、本研究においては交際期間が長いほど暴力行為は起きやすく、それらが複合的に作用して恋人による被支配感を高めるのではないかという仮説を立てた。なお、上野・松並・青野（2018）と同じく本研究における「恋人」とは調査参加者がそう認識する者のことであり、交際の様態の詳細は問わない。

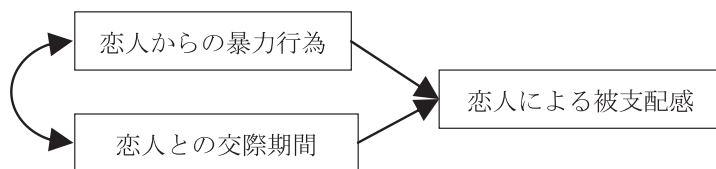


Figure 1 本研究で検討するモデル

2. 方法

調査手続き

インターネット調査会社を通し、モニターとして登録している全国の20-35歳の未婚者500名を対象としたインターネット調査を行った。

調査参加者

女性264名（52.80%）、男性234名（46.80%）、その他2名（0.40%）の回答が得られた。平均年齢は27.87歳であった（ $SD=4.25$ ）。

倫理的配慮

調査に先立ち、福山大学学術倫理審査委員会の承認を得た。調査サイトの冒頭には、参加は自由であること、調査は無記名で回答者は特定されないこと、回答を研究以外に使用しないこと、調査の参加または不参加による不利益は生じないこと、回答を中断しても構わないことを明記し、同意欄にチェック後に以降の質問に回答できるようにした。

質問項目

1. **恋人との交際経験の有無** 現在または過去に恋人がいた経験があるか尋ね、経験がある者のみ、以降の質問への回答を求めた。

2. **恋人から受けた暴力行為** 恋人から受けた暴力行為の種類と経験頻度を測定するため、赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野（2017）の全18項目を用いた。“あなたはこれまでに恋人から以下の行為を受けたことがありますか”と尋ね、「これまでに一度もない」、「1回」、「2回」、「3～5回」、「6～10回」、「11～20回」、「20回以上」の7件法で回答を求めた。なお、交際した恋人が複数いる場合はその中のひとりについて回答するよう教示した。

3. **恋人による被支配感** 恋人に支配されている程度を測定するため、上野・松並・青野（2018）の8項目を用いた。前問の恋人への自分の態度や気持ちについて、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。過去の恋人である場合、恋人だった当

時の自分の様子を答えるよう教示した。

4. 恋人との交際期間 上記の恋人との交際期間について、年月日それぞれの記入を求めた。

3. 結果

分析対象者の抽出

調査参加者のうち、恋人との交際経験がある女性185名（女性の70.08%）、男性144名（男性の61.54%）、計329名（全体の66.06%）を分析対象とした。年齢の平均は28.09歳であり（ $SD = 4.09$ ）、男女差はなかった（ $t(327) = .79, n.s.$ ）。年代は20-24歳が67名（20.36%）、25-29歳が148名（44.98%）、30-35歳が114名（34.65%）であり、20代前半が少なく20代後半が最も多かった（ $\chi^2(2) = 30.17, p < .001$ ）。

恋人から受けた暴力行為の検討

上野・松並・青野（2018）で用いた4因子、すなわち、「友人との付き合いを制限される」、「いつも行き先を告げさせられたり、報告させられたりする」など、行動を制限、監視される“精神的暴力：束縛”（3項目）、「あなたを否定したり、意見を認めなかったりする」、「相手の意に沿わないと無視される」など、否定、無視、バカにされる“精神的暴力：軽侮”（7項目）、「げんこつや怪我をさせるようなもので殴られる」、「別れるなら死んでやると言われる」などの“身体的暴力・脅迫”（5項目）、「性交を強要される」、「無理矢理キスされたり、身体に触れられたりする」などの“性的暴力”（3項目）に分類した。なお、上野・松並・青野（2018）と同様に、暴力行為を頻繁に受けたことがある者は多くなかったため、暴力行為を受けたことがない者を0点、ある者を1点とする2件法に変換した上でそれぞれの暴力行為ごとに合計得点を算出した。信頼性係数は、“精神的暴力：束縛”が $\alpha = .85$ 、“精神的暴力：軽侮”が $\alpha = .86$ 、“身体的暴力・脅迫”が $\alpha = .90$ 、“性的暴力”が $\alpha = .84$ であった。

暴力行為を一度でも受けた経験がある者は、“精神的暴力：束縛”で女性58名（交際経験がある女性の31.35%）、男性54名（交際経験がある男性の37.50%）、“精神的暴力：軽侮”で女性92名（交際経験がある女性の49.73%）、男性60名（交際経験がある男性の41.67%）、“身体的暴力・脅迫”で女性30名（交際経験がある女性の16.22%）、男性32名（交際経験がある男性の22.22%）、“性的暴力”で女性57名（交際経験がある女性の30.81%）、男性31名（交際経験がある男性の21.53%）であった。いずれの暴力行為も、受けた経験のある者とない者の割合に男女差はなかった（“精神的暴力：束縛” $\chi^2(1) = 1.36, n.s.$; “精神的暴力：軽侮” $\chi^2(1) = 2.12, n.s.$; “身体的暴力・脅迫” $\chi^2(1) = 1.91, n.s.$; “性的暴力” $\chi^2(1) = 3.56, n.s.$ ）。

なお、暴力行為を一度でも受けたことがある者が恋人との交際経験のない者も含む調査参加者全体に占める割合は、“精神的暴力：束縛”で女性21.97%、男性23.08%、“精神的暴力：軽侮”で女性34.85%、男性25.64%、“身体的暴力・脅迫”で女性11.36%、男性13.68%、“性的暴力”で女性21.59%、男性13.25%であった。

恋人との交際期間の検討

1年を365日、1ヶ月を30日とし、交際した日数を算出した。最小値は1日、最大値は7,610日（20.91年）、中央値は545日（1.50年）、平均値は894.82日（2.46年）であった。なお、交際

期間の長さにも男女差はなかった ($t(327) = 1.71, n.s.$)。年齢と交際日数の相関係数を算出したところ、 $r = .16$ ($p < .01$) であった。何歳の時の交際相手かが不明のため、今後の分析には年齢は考慮せず、交際日数のみを用いることとした。

恋人から受けた暴力行為の有無と性別を独立変数、交際日数を従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、“性的暴力”の有無の主効果のみが有意であった ($F(1, 325) = 4.54, p < .05, \eta^2 = .01$)。“性的暴力”を受けたことがある群 ($n = 88, M = 1077.49, SD = 951.11$) が受けたことがない群 ($n = 241, M = 828.12, SD = 874.62$) よりも交際日数が長かった。

恋人による被支配感の検討

恋人による被支配感項目を Table 1 に示した。信頼性は $\alpha = .82$ と十分高かったので、合計得点を算出した。恋人から受けた暴力行為の有無と性別を独立変数、恋人による被支配感を従属変数とする 2 要因分散分析を行った (Table 2)。“精神的暴力:束縛”、“精神的暴力:軽侮”、“性的暴力”ではいずれの主効果も有意であり、暴力行為を受けたことがある者がいない者より、男性が女性より被支配感が高かった。“身体的暴力・脅迫”では交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った。その結果、“身体的暴力・脅迫”を受けたことがない群において男性が女性より被支配感が高く ($F(1, 325) = 18.79, p < .001, \eta^2 = .06$)、男女とも“身体的暴力・脅迫”を受けたことがある者がいない者より被支配感が高かった (女性 $F(1, 325) = 41.35, p < .001, \eta^2 = .05$; 男性 $F(1, 325) = 4.39, p < .05, \eta^2 = .06$)。

Table 1 恋人による被支配感項目

	M	SD
恋人の反応が怖いので、言いたいことを言えない	2.43	1.19
恋人が機嫌を損ねないように、いろいろなことを我慢している	2.75	1.16
何をするにも恋人がどう思うか気にしてしまい、自由にふるまえない	2.63	1.17
いつも恋人の顔色をうかがい、びくびくしてしまう	2.38	1.24
恋人と別れたくなっても、恋人が許さないのも無理だと思う	2.23	1.11
恋人といると、安心してのびのびできる*	2.39	1.12
恋人とは異なる意見でも、話し合えばわかってくれると思う*	2.54	1.11
恋人に対しては誰よりも正直に気持ちを打ち明けられる*	2.66	1.10

得点範囲：1-5

* 逆転項目

Table 2 恋人による被支配感得点の分散分析結果

	暴力	性別	n	M	SD	主効果		交互作用		
						F値	η^2	F値	η^2	
精神的暴力： 束縛	あり	女性	58	22.00	7.02	暴力	31.73***	.09	0.85	.00
	あり	男性	54	23.35	4.85	性別	8.54**	.02		
	なし	女性	127	17.57	5.81					
	なし	男性	90	20.17	5.36					
精神的暴力： 軽侮	あり	女性	92	20.25	6.75	暴力	17.95***	.05	0.12	.00
	あり	男性	84	23.13	5.79	性別	16.02***	.05		
	なし	女性	93	17.68	6.06					
	なし	男性	84	20.10	4.72					
身体的暴力・ 脅迫	あり	女性	30	25.07	6.16	暴力	36.26***	.09	9.30**	.02
	あり	男性	32	23.22	6.12	性別	0.57	.00		
	なし	女性	155	17.77	5.92					
	なし	男性	112	20.83	5.07					
性的暴力	あり	女性	57	21.96	7.22	暴力	16.11***	.04	3.03	.01
	あり	男性	31	22.71	6.02	性別	7.43**	.02		
	なし	女性	128	17.62	5.73					
	なし	男性	113	20.99	5.17					

得点範囲：8-40
** $p < .01$, *** $p < .001$

モデルの検討

モデルの検証に先立ち、恋人による被支配感と他変数との相関係数を算出した (Table 3)。男女とも交際日数とは有意な相関が見られなかったが、恋人からの暴力行為とは有意な正の相関があった。

Table 3 恋人による被支配感と他変数の相関分析結果

	交際日数	恋人からの暴力行為			
		精神的暴力：束縛	精神的暴力：軽侮	身体的暴力・脅迫	性的暴力
女性	-.09	.37***	.37***	.42***	.39***
男性	-.02	.30***	.32***	.25**	.18*

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 1 に示したモデルを検証するため、性別で集団を分け、集団間の等値制約をおかずに多母集団同時分析を行った。当初のモデルはRMSEA = .27と適合度が低かったため、男女いずれも有意でなかった交際日数と“精神的暴力・束縛”、交際日数と“性的暴力”の相関を除外したところ、十分な適合度が示された ($\chi^2(4) = 3.79, p = .44, GFI = 1.00, AGFI = .96, CFI = 1.00, RMSEA = .00$)。なお、男女間で係数の大きさに差があった、交際日数と“身体的暴力・脅迫”の相関、“身体的暴力・脅迫”から恋人による被支配感へのパス、“性的暴力”から恋人による被支配感へのパスに等値制約をおいた多母集団同時分析も実施したが、適合度は先のモデルよりも低かったため ($\chi^2(7) = 21.98, p < .01, GFI = .98, AGFI = .87, CFI = .98, RMSEA = .08$)、等値

制約をおかない分析を採用することとした。有意でなかったパスを削除した女性の結果をFigure 2に、男性の結果をFigure 3に示した。

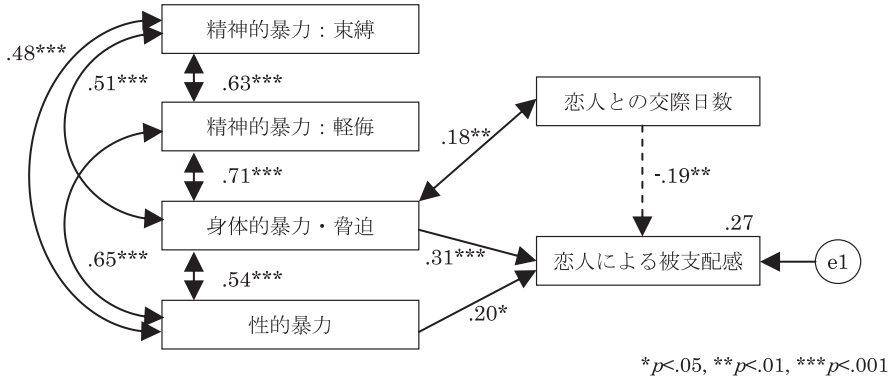


Figure 2 女性における、恋人からの暴力行為、恋人との交際期間、恋人による被支配感の関連 (N=185)



Figure 3 男性における、恋人からの暴力行為、恋人との交際期間、恋人による被支配感の関連 (N=144)

男女に共通して見られた結果は、暴力行為間の正の相関のみであった。女性は“身体的暴力・脅迫”と恋人との交際日数に正の相関、“身体的暴力・脅迫”および“性的暴力”から恋人による被支配感への正のパス、恋人との交際日数から恋人による被支配感への負のパスが見られた。しかし男性は暴力行為と交際日数間の相関も、恋人による被支配感への有意なパスも一切見られなかった。

4. 考察

本研究では、20-35歳の未婚者を対象としてデートDV被害に関する調査を行った。これまで

のデートDV研究では、男性の方が女性より精神的暴力と身体的暴力を多く受けているという結果が得られており (Jezl, Molidor, & Wright, 1996; 松野・秋山, 2009; 森永他, 2011; 上野他, 2011; Zweig, Dank, Yahner, & Lachman, 2013)、本研究と同じ調査項目を用いた上野・松並・青野 (2018) でも同様であったが、本研究においてはいずれの暴力においても男女差が見られなかった。このことから20代後半を中心とする年齢層では女性への暴力行為も行われやすくなり、男性との差がなくなると推察される。ただし、本研究は調査対象者の年齢層だけでなくインターネット調査という手法もこれまでの研究とは異なり、それが回答に影響を与えている可能性も否定はできない。いずれにせよ、従来のデートDV研究が明らかにしてきたことと同様に、世間一般のイメージである「男性加害者、女性被害者」という図式は本研究においても見られなかった。

暴力行為を受けるのは男性が多いわけではないにも関わらず、恋人による被支配感は男性が高かった。これは被支配感の男女差が見出されなかった上野・松並・青野 (2018) とは異なる結果である。交際相手のいる率 (国立社会保障・人口問題研究所, 2017)、結婚している率 (国立社会保障・人口問題研究所, 2018) とともに男性が低いため、恋愛関係においては男性の立場は弱くなりがちなのだろう。特に結婚が切実な課題となりやすい20代後半から30代前半は、大学生とは異なり、恋人の機嫌を損なわぬよう嫌われぬよう振る舞う男性が多いのかもしれない。しかしながら、今回の調査では交際時の年齢については尋ねていないため、上記は推測にすぎない。

分散分析および相関分析の結果からは、いずれの暴力行為でもそれを受けた経験がある者は被支配感が高いことが示された。多母集団同時分析では女性において身体的暴力と脅迫、性的暴力を受けると被支配感が高くなることが示されたが、男性ではいずれの暴力からのパスも見られなかった。これは、男女ともに暴力行為を受けると相手に支配されるが、その関連の強度が女性と男性で異なることを示していると解釈できる。女性が身体的暴力や脅迫、性的暴力から受ける影響は、男性がそれらから受ける影響よりも重大なのである。上野・松並・青野 (2018) では、本研究と同様に男女とも全ての暴力行為に相関が見られたが、軽侮される精神的暴力と性的暴力によって男女とも恋人に支配され、束縛される精神的暴力は男性の被支配感をむしろ低めるといふ本研究と異なる結果が得られている。本研究における結果は、どのような暴力行為も男女関わらず相手を支配するという暴力行為の重大性を示すものであるが、上野・松並・青野 (2018) との違いは調査参加者の年齢層のみに帰せられるものなのかについては今後の検討が必要である。

交際期間と暴力行為の関連の検討では、男女とも性的暴力を受けた群の交際期間が長かった。また、女性においては身体的暴力および脅迫を受けることと交際期間に正の相関があった。精神的暴力と男性の身体的暴力および脅迫が交際期間と関連していなかったが、これはそれらの暴力が交際の初期から起きている可能性を示唆するものであろう。実際、精神的暴力は他の暴力に先んじて見られることが指摘されている (Cornelius & Resseguie, 2007)。また、男性が身体的暴力をふるえば重大な行為だが女性のふるう身体的暴力はたいしたことがないと見なされる (Hamby & Jackson, 2010; Rhatigan, Stewart, & Moore, 2011)。性別に関わらず性的暴力を受け

ること、女性が身体的暴力や脅迫を受けることは、ある程度の交際期間がなければ発生しにくいことでもあり、またそのような暴力を受けていると関係を絶ちにくいのだろうと考えられる。一方、寺島他（2013）では性的行為の強要は恋人と別れさせる作用を持つという、本研究の結果とは矛盾した結果が示されている。この原因についてはいくつかの可能性が考えられる。まず、寺島他（2013）の調査参加者は大学生および専門学校生、しかもそのほとんどが女性である。年齢が低いと性的行為の強要に強い抵抗を示し別れる決断ができるが、本研究の調査参加者のように高い年齢層ではそれができにくい可能性があり、また性的暴力は女性と男性にとって重大性や意味が異なる可能性もある。他にも、別れる決断をしても実際に別れるまでには時間がかかり、結果として交際期間が長くなるという可能性も考えられる。さらに、本研究では暴力行為のレベルについては検討できなかったため、今後は暴力行為のレベルも加味し、どのようなレベルの暴力が交際期間のいつ頃見られ、交際の継続や終了にどう影響するか検討を行う必要がある。例えば、怪我をさせるほど殴るという身体的暴力と軽く叩くという身体的暴力や、レイプという性的暴力と性的行為を拒否した相手をなじるといった性的暴力では、同じ暴力でもレベルが明らかに異なり、その行為が与える影響も当然異なると考えられるからである。

交際期間と恋人による被支配感の関連は男性では見られず、女性では交際期間が短いほど恋人による被支配感が高くなることが示された。交際期間と暴力行為、暴力行為と被支配感がそれぞれ関連するにも関わらず、交際期間と被支配感に負の関連があるという複雑な関係性が示されたが、交際期間が短い場合は相手の顔色を伺ってしまい、（暴力行為が存在するような関係でなければ）慣れるにつれのびのびと振る舞えるようになるのだろう。とはいえ、交際期間と被支配感の因果関係については今後さらなる検討が必要である。本研究では交際期間から被支配感へのパスを想定し、モデルの適合度の高さはその因果関係を支持するものであったが、逆の因果関係も想定できるからである。すなわち、恋人による被支配感が高いために交際関係を終わらせることができず、暴力行為によって引き起こされた被支配感ならば、その傾向は特に強くなると推察される。デートDV被害を暴力行為と被支配感に分けて捉えるという本研究が用いた手法の有効性と必要性は、暴力行為とは関係なく被支配感が高い者が特に男性に存在することからも明らかであり、今後も暴力行為と被支配感の違いと関連を考慮しながら、交際期間との関係を検討していくべきだろう。

本研究では青年後期から成人前期にあたる未婚者のデートDV被害経験について検討したが、今後は交際の時の年齢を加味した上で、交際期間と年齢を考慮したより詳細な検討を行う必要がある。また、暴力行為の被害経験のみに焦点を当てたが、暴力行為は相互的で、被害者が加害者でもある傾向が見られる（赤澤, 2015; White & Koss, 1991）。さらに、支配-被支配関係に着目すると、暴力行為の加害頻度が高い者だけでなく被害頻度が高い者も恋人をコントロールしようとする、加害頻度が高い者ほど恋人に決定を任せそれに従う傾向があること、それは女性に顕著であることを示唆する研究もあることから（松野・新井, 2015）、ジェンダーと支配-被支配関係、加害・支配と被害・被支配の対応関係にも着目した研究が今後必要である。

あとがき

本研究は平成26年度福山大学学内研究助成金およびJSPS科研費JP16K01805の助成を得て行われた。

本研究における調査の立案、実施は共著者全員で行った。分析と執筆は第一著者が行い、他の著者は考察に全般的に関わった。

引用文献

- 赤澤淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデートDV 発達心理学研究, 26, 288-299.
- 赤澤淳子 (2016). 国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題 福山大学人間文化学部紀要, 16, 128-146.
- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 (2017). デートDVにおける暴力の頻度と精神的ダメージ—ジェンダーと暴力の双方向性への着目 福山大学人間文化学部紀要, 17, 56-68.
- 赤澤淳子・竹内友里 (2015). デートDVにおける暴力の構造について—頻度とダメージとの観点から 福山大学人間文化学部紀要, 15, 51-72.
- Cornelius, T.L., & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior, 12*, 364-375.
- Hamby, S., & Jackson, A. (2010). Size does matter: The effects of gender on perceptions of dating violence. *Sex Roles, 63*, 324-331.
- 伊田広行 (2010). デートDVと恋愛 大月書店
- 井ノ崎敦子・野坂祐子 (2009). 大学生における加害行為と攻撃性との関連 学校危機とメンタルケア, 2, 73-85.
- Jezl, D.R., Molidor, C.E., & Wright, T.L. (1996). Physical, sexual and psychological abuse in high school dating relationships: Prevalence rates and self-esteem issues. *Child and Adolescent Social Work Journal, 13*, 69-87.
- 片瀬一男 (2013). 第7回「青少年の性行動全国調査の概要」 日本性教育協会 (編) 「若者の性」白書—第7回青少年の性行動全国調査報告 (pp.9-24) 小学館
- Kaura, S.A., & Lohman, B.J. (2007). Dating violence victimization, relationship satisfaction, mental health problems, and acceptability of violence: A comparison of men and women. *Journal of Family Violence, 22*, 367-381.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017). 2015年社会保障・人口問題基本調査 (結婚と出産に関する全国調査) 現在日本の結婚と出産—第15回出生動向基本調査 (独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書 Retrieved from http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf (2018年9月28日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2018). 人口統計資料集 (2018) Retrieved from <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2018.asp?chap=0> (2018年9月28日)
- 今野裕之 (1999). 恋愛関係における統制感について 筑波大学心理学研究, 21, 149-154.
- 今野裕之・泊 真児 (2001). 恋愛関係における被統制感について 目白大学人間社会学部紀要, 1, 45-55.
- 松井めぐみ・宮前淳子・寺島 瞳・宇井美代子・竹澤みどり (2012). デートDVの実態の検討 (7) —交際期間と加害行為・被害行為との関連 日本心理学会第72回大会発表論文集
- 松野 真・秋山 胖 (2009). 若年層における特定異性間の暴力 (dating violence) に関する研究—大学生を対象としたdating violenceに関する意識・実態について 生活科学研究, 31, 117-128.
- 松野 真・新井邦二郎 (2015). デートDV加害・被害深刻度質問紙及びデートDV支配・被支配度質問紙の作成 東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 187-196.

- 森永康子・Irene H. Frieze・青野篤子・葛西真記子・Manyu Li (2011). 男女大学生の親密な関係における暴力 女性学評論, 25, 219-236.
- 内閣府男女共同参画局 (2018). 男女間における暴力に関する調査報告書 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h29danjokan-12.pdf (2018年9月28日)
- Rhatigan, D.L., Stewart, C., & Moore, T. M. (2011). Effects of gender and confrontation on attributions of female-perpetrated intimate partner violence. *Sex Roles, 64*, 875-887.
- 笹竹英穂 (2014). 大学生の心理的デートDVの被害経験の実態および被害の認識の性差 学生相談研究, 35, 56-69.
- 寺島 瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ (2013). 大学生におけるデートDVの実態の把握—被害者の対処および別れない理由の検討 筑波大学心理学研究, 45, 113-120.
- 上野淳子 (2014). デートDV研究の問題点 四天王寺大学紀要, 57, 195-205.
- 上野淳子・松並知子・青野篤子 (2018). 大学生におけるデートDV被害の男女差—恋人による被支配感と自尊感情に与える影響 四天王寺大学紀要, 66, 91-104.
- 上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子 (2011). 大学生の性に対する態度がデートDVに及ぼす影響 四天王寺大学紀要, 53, 111-122.
- White, J.W., & Koss, M.P. (1991). Courtship Violence: Incidence in a national sample of higher education student. *Violence and Victims, 6*, 247-256.
- Zweig, J.M., Dank, M., Yahner, J., & Lachman, P. (2013). The rate of cyber dating abuse among teens and how it relates to other forms of teen dating violence. *Journal of Youth & Adolescence, 42*, 1063-1077.

